

農業農村工学技術者の育成に官民学のトライアングルを使おう

Try to Explore the Triangle of "Public, Private Sectors and Academia"
to Development of Human Resources in Irrigation, Drainage and Rural Engineering

岡島賢治・成岡 市

Kenji OKAJIMA and Hajime NARIOKA

1. はじめに

農業農村工学分野において、行政・民間・大学の「トライアングル」を組織して(図-1)、この三角形の辺長を短縮し、三頂点にある構成員個々の個人力を向上させ、新たな概念の集団を創り上げてみてはいかがだろうか。

これは農業・農村の整備に関して計画・技術・教育などの多方向から組織的に取り組むことの是非に関する重要な提案である。生産農家および農村に関わる農業農村工学技術者の育成、新技術の創出・探索・適用・研究・開発、そしてそれらを円滑に進める情報共有の必要性を求めた意見でもある。

2. 「行政」

国や地方の行政組織の立ち位置は不動である。農林水産分野だけが自律して特別に機能しているわけでもない。行政には、さまざまな情報の収集とその分析精度をより一層高め、我々に周知していただきたいこと、人事採用に関してより明確な方向性と可能性を公示していただきたいこと、などを求めたい。

加えて行政・民間・大学のトライアングルに積極的に参加できるように関係制度を柔軟かくしていただければ、なおありがたい。

三重大学大学院生物資源学研究科

Graduate School of Bioresources, Mie University

Keywords : 農業農村工学、技術者、人材育成、行政・民間・大学、トライアングル



図-1 「官民学のトライアングル」概念図

農業農村工学会には、技術者継続教育機構(CPD 機構)の仕組みがある。これを核にしてトライアングルの活性化を地域規模から始め、たとえば大学授業に多くの非常勤講師等を誘致、共催型の技術研究会・研修会・講習会の開催、大学に期限付き寄付講座の設置、それらを確認する連携協定の締結および広報による周知、などを提案したい。行政はこれに対して遠慮無く立ち上がっていただきたい。

3. 「民間」

民間は、若い技術者に対して基礎学力や問題設定能力、強い目的意識、狭い専門領域に偏らない姿勢を期待している。採用された人材が、日本国内外で活躍できる能力や個性は、この期待感に集約されている。国際エンジニアリング連盟は、Engineer に複合的な問題解決や特定の要求に合った体系・構成要素・工程を設計できる能力を求めている。

技術者育成の各所各様の認識を束ね高度化

し、国際水準を保証する非営利団体「日本技術者教育認定機構(JABEE)」が設立され、14年の経過と累計約22万人の修了生が輩出されている。この認定制度は教育改善に有意義との高評価がある。しかし、JABEEが認定しているプログラムは最近で486、そのうち農業工学関連分野のプログラムは15といわれ、当初の機能を発揮するのに十分な数・割合とは言いがたい。しかも、認定を終了せざるを得なくなったプログラムが出ていることは深刻である。その理由は「JABEEの国際戦略が弱い、修了生自身がメリットを感じない、JABEEおよび技術士の社会的認知度が低い、プログラムを維持する教員の負担が過大である、相次ぐ改組・再編によりプログラム認定や維持ができない、審査員のボランティア参加に限界がある」などであり、各方面から厳しい改善要求が出されている。JABEEに多くを期待するゆえと理解したい。

4. 「大学」

文部科学省は「学生には困難を乗り越える能力が求められる、卒業生の存在は教育の成果であり大学の評価である、国際的に通用する魅力をみせる必要がある」と強調している。とくに大学院教育については「学生に体系的な教育を提供、教育課程を修了した者に特定の学位を与える課程制大学院制度を実現、学位が保証する能力と価値を可視化」すること、これらが社会的共通認識を伴う必要があるとしている。

大正10年12月に設置された三重高等農林学校の翌年4月、新設の農業土木学科にて開講された授業科目名をみると、必修科目や選択科目など名称は多少異なるが現代のそれとほとんど変わりの無い科目群が並ぶ。そして教育の特色として「1. 講義式の教授法を排し、自学研究主義の教授法を採ること(注的講義方式授業の排除)、2. 教授の実際化をはかり、これが実現する方法を講ずること(実験実習の

重視)」などと記録されている。しかし現在、このような教育組織が維持困難で、学生教育や教員補充の発言権も縮小している農業土木系分野の学科・講座が全国的に増加している。

東海地域において、一つの試みが動き始めている。「行政(農政局および地方行政)、民間(事業団体など)、大学(三重大学および岐阜大学)」の農業土木トライアングルである。講演会では事例紹介をしたい。



図-2 近鉄久居駅(三重県津市)前の上野英三郎とハチ公の像

<参考>

石井敦：耕地整理事業から土地改良事業への展開過程—事業内容と類縁用語の検討を中心に—、三重大学生物資源学部学術紀要 33、29-37(2006)／石井敦：上野英三郎「近代農業土木学の創始者」、県土連50年史、三重県土地改良事業団体連合会、250-252(2008)／成岡市：巻頭言、JAGREE(農業土木事業協会誌) 90、2-3(2015)／成岡市：展望、水土の知 84(2)、1-2(2016)／農業農村工学会編：小特集 人材育成の場を考える、水土の知 84(1)、1-39(2016)／牧隆泰：農業土木学の始祖 上野英三郎博士の足跡、農業土木学会誌 40(1)、47-59(1972)